



ジョージア(グルジア)便り その72

バレエダンサー試練の時

文 高野 陽年

text by Yonen Takano



るで小さい子供を背負っているかのように、じめじめとした乾ききらない日本の空気は体にまとわりつき、頬を伝わる汗は止まることを知らない。たまに差す夏日は天からの褒美のようにも思える。しかしそれはそれで体から染み出る水分をより早く蒸発させているようで、実家の一室はすぐに湿っぽくなってしまう。冷房でも入れればいいじゃないかと思うだろうが、いつもよりずっと少なくなってしまう稽古に少しでも負荷をかけるために、体が嫌がる環境をあえて作っている。体重は日本に帰ってきてからもほとんど変わっていないのだが、少ない練習量に不安を煽られ、鏡を見る度に無駄な肉が乗っているのではないかと心配する。幸いにも吹き抜けになっている居間の天井はジャンプをしてもなんの苦もない。だが着地するたびにドンドンと響く音は、かつて家族団らんの場所であったフロリングの木目を割くように、そして一人で稽古する虚しさを増幅させている。

バレエダンサーは社会が経験している未曾有の事態の中、スタジオで思う存分動けたところは遠い過去のようにも思え、ほとんどが家の一室で細々と稽古することを余儀なくされている。僕の実家は郊外の一軒家で、いくら飛び跳ねようが文句は言われないが、アパートに暮らすものはマットを重ね、その

うえで猫が塀の上を歩くようにひっそりと練習しているというから大変である。たまに劇場から届くメールには毎回のように一斉練習再開延期の旨が書かれていて、公演再開はまだ夢のまた夢である。誰も何も予想が立てられないのである。プロのダンサーになつてから10年近くとどまることなく踊り続けてきたが、急に踊る機会がこうも失われ、それでも回る社会を見ていると、僕らがやっていることは生産性に欠き、人間生活、そして社会にとってはそのほど重要ではないのかと、もどかしくなる。

音楽配信アプリから拾ってきた味気のない練習用のピアノ伴奏曲を止め、2リットルペットボトルの水をラップ飲みしようとする、窓越しに庭からポトポトと止めどなく何かが落ちる音がした。どうしても気になるのでかかとを踏んだスニーカーでそのまま庭に出てみると沙羅の木に幾百も咲いた真っ白い花が一斉に首からもげたように落ちていたのではない。昨日までは己の純白さ絢爛さを見せびらかすように咲き誇っていた花は今、茶色がかって土の上に広がっている。あれだけ大きなつぼみをつけるのに時間をかけ、ほんの一時見事な大輪を咲かせて散りゆく姿にバレエダンサーを重ねてしま

た。「舞台にいつ戻れるのだろうか」いや、悲観的になることはない。この沙羅の木は僕がこの家に来た時から変わらずに咲いている。もしかしたらこの木の先祖は仏陀の涅槃を見送ったかもしれない。何があるとも繰り返して咲かせてきた花こそバレエダンサーである。怪我をして何カ月、数年にわたって練習から遠ざかってもまた舞台に戻ることはできるのだから、健康なまま舞台から離れるのは何も怖いことではないのだ。社会が立ち直れば必ずバレエは必要とされる。

咲殻を握りしめ、舞台の上で踊る自分を想像するのであった。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。